
唐辛子とパプリカ

狼之羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唐辛子とパプリカ

【NZコード】

N6604C

【作者名】

狼之羊

【あらすじ】

森富さちは十年間忘れる事がなかつた友人がいた。その友人との唯一の共通点は唐辛子とパプリカだった。

私には中学から続けてきた習慣がある。

と言つと、随分大げさなようだが、十年間一度も欠かした覚えがない。

それは、夜眠る前にある一人の友人の平穏無事をどこかの神様か仏様、もしくは空の星、とにかく合掌姿が様になるようなものに祈る事だ。

その友人は何年來もの無二の親友とも、何でも話せるベストパートナーとも言い難く、時々自分でも、何故彼女がこんなに胸を占める瞬間があるのか、不思議に感じる事もある。

しかし、同時にいつまでもこの瞬間は残っているだろうとも思う。

私達は唐辛子とパプリカの間柄なのだ。

席替えで私の席がみちるちゃんの隣になつたのは中学一年生の五月だつた。

中学生になつて初めての席替えは、くじ引きで厳かに執り行われた。私の名字は森宮で、出席番号は三十九番。くじ引きを引くのは一番最後で、引いたくじも三十九番だつた。

私は席を動かす必要がなくなつたので、けたたましく机を移動させていくみんなを眺めていた。四月の頃のワックスのかかつたつる威力の床は、すでに輝きを失つていて、机の脚との摩擦に悲鳴を上げている。小学校から仲良しの久美ちゃんとやつちゃんが席を替わるうかと言つてくれたが、私は替わらなくても構わなかつた。私は三十九番が大いに気に入つていたのだ。一番端っこで、窓際であり、しかもロッカーが近い。便利だし、何より後ろを気にしなくて済む。後ろの席に慣れてしまつてゐるせいかもしれないが、前の席になると背中に視線が刺さるような感じで居心地が悪いのだ。みんなが机

を動かし終わり、周りの顔ぶれを見て騒ぎ始めた頃、一人だけまだ机を動かしている女の子がいた。

その子こそ、一番席からはるばる私の隣の席に移ってきた、青山みちるちゃんだつた。

みちるちゃんは面倒くさそうに片腕でズルズルと机を引きずり、もう動き終わった子の机にドカドカとぶつかりながら歩いて来た。みちるちゃんはあくまで最短距離を進もうとしているらしく、正方形の対角線を引くように斜めを突つ切つてくる。

ようやく私の隣に辿り着いたみちるちゃんは、大きな溜息を一つついて椅子に座つた。小学校で一度も同じクラスになつた事がなかつたけれど、みちるちゃんの噂は聞いていた。いつも髪がボサボサで、長いよれよれのスカートしかはかない、言葉遣いが汚くて乱暴者の不良少女、であるらしい。久美ちゃんが同じクラスだつた時に言つていた話で、私が実際にみちるちゃんを見るのはそれが初めてだつた。

確かに肩まで伸びた髪は寝起きのようにボサボサで、制服は既にやれ始めていた。しかし、私がみちるちゃんを見て気になつた事はそれではなかつた。みちるちゃんはすこく美人さんだつたのだ。睫毛が長くて、整つた鼻と綺麗な口の形をしていた。身なりがメチャクチャなのが、逆に唯一の汚点だつた。

私の席から久美ちゃんが見えた。右斜め、四席分くらい離れている所。手と顔の表情で「嫌な奴が隣に来たわネ」と言つてゐる。それから三席分左に行つた所から、やつちゃんが顔を出していて、「さつち、私はここだよ」と手を振つてゐるのが見えた。三人ともきれいにバラけてしまつたようだ。みちるちゃんは座つた後は机に顔を伏せて、ふて寝してゐた。私はとりあえず、次の国語の授業のために教科書を出して先生を待つた。

みちるちゃんとの初めての会話は意外と早く、その授業で実現した。国語の授業中、私はペンケースをあさつていて、消しゴムがない事

に気が付いた。そういえば、失くしたまま補充をし忘れていたのだ。隣の席ではやる気のなさそうな手つきで、教科書をめくっているみちるちゃんがいる。一瞬どう話しかけるか迷つたが、じく普通に頼む事にした。

「消しゴム失くしちゃつたから、良ければ貸して下さい。」

敬語になつてしまつたのは、少なからず私もみちるちゃんの他を寄せ付けない雰囲気に飲まれていたからだろ。みちるちゃん前触れもなく私から話しかけられた事に驚きを隠せないといった様子だつたが、無言で透明な箱型のペンケースから白い消しゴムを取り出すと私の机の端に置いた。消した跡で黒くなっている所がほとんどない、新品のような消しゴムだ。私はノートの間違えた箇所を消し終わると、同じようくみちるちゃんの机の端に置いてありがとうと言つた。

すると、みちるちゃんは置かれた消しゴムをすぐまた私の机に戻して言つた

「今日一日使つていいよ。私、ノート取らないから。」

それを証明するように、透明なペンケースにはシャーペンが一本も入つてなかつた。入つていたのは、何故かこの消しゴムとピンクの蛍光ペンとネームペンが一本ずつだ。

私はまたありがとうを言い、みちるちゃんと私の記念すべき初会話は幕を閉じた。

吹き出したくなるような、くすぐつたい気分だつたのを覚えている。学年中で噂になるような不良少女から消しゴムを借りられたのだ。言つてみれば、私達は正反対の子供だつたと言える。

いつでも問題を起こしている問題児と影の薄くて大人しいイメージしかなかつた私達は偶然にも隣同士という接点を得て、会話を成立させる事に成功したのだ。

窓の外を見てみると、どんより曇つていて今にも雨が降りそuddつた。私はふと、みちるちゃんは傘を持っているだろかと思つた。もし持つていなかつたら、学校に置きっぱなしにしていた折り畳み

傘の方を貸してあげよう。消しゴムのお返しに。私はまた間違えたので、みちるちゃんの消しゴムでノートをこすった。

私の通学路は家から学校まで約一十分、住宅街の一角で似たような造りの家ばかりが並んでいるため、初めて来る人には迷路のような所だ。

途中にみちるちゃんの家があるとこりのを、私はお母さんに聞いて初めて知った。緑色の屋根のおうちだという。そんなに近く所だつたのに今まで私とみちるちゃんに親交がなかつた事が不思議だつた。お母さんはみちるちゃんのお母さんとは知り合いらしかつた。席替えでみちるちゃんの隣になつた事を言つと、お母さんは神妙に頷いて言つた。

「さち、あの子の家は色々大変だから、気を遣つてあげなさいよ。私はその時、テレビに集中力の半分以上を奪われており、模範的な生返事を返した。後々になつてみちるちゃんの家の大変さを知つても私の態度は変わっていなかつたように思う。もし変わつていたとしても、みちるちゃんが私の気遣いを許さなかつたと思うのだ。でもそれは気の利かない子供だつた私の、単なる言い訳に過ぎないような気もする。

登校中の事だつた。みちるちゃんが電柱にもたれるように立つてゐるのを見つけて驚いた。みちるちゃんは綺麗な口の形をぎゅつと結んでいて、もう衣替えの日は過ぎたのに冬服のスカートをだらしなさ気に着ている。私が来た事に気が付いているようだつたが、知らない振りをしていた。

明後日な方を向いているみちるちゃんに私がおはよつを言つと、みちるちゃんは少し面食らつた顔をして振り返つた。多分、先に話しかけられるとは思つていなかつたのだろう。クラスでみちるちゃんにおはよつを言つ人を私は知らない。みちるちゃんはそのまま返答に困つたようにしばらく沈黙していた。おそらく自分から話しかけるのを前提にシユミレートして来た会話を立て直していたのかもし

れない。

「これ。」

みちるちゃんはおはよつは返さず、背中に隠すよつて持つていた赤い折り畳み傘を差し出した。

昨日私が貸したものだ。私は几帳面なほどしわ一つなく巻かれた傘を受け取った。

「ありがと。」

みちるちゃんは言い捨てるようにしゃつて、さかさか歩いて行つてしまつた。

この時から、私とみちるちゃんは友達になつた。おはようを言えなくもありがとうは言える不良少女みちるちゃんど。気付かれた期間がたつた三ヶ月の友情でも、記憶に残り続けるよつな鮮烈な友達に。

みちるちゃんの口癖の一ついで、まあみる、とこのがつた。久美ちゃんが言葉遣いが悪いと評すのも、この辺りから来ている。とにかく所構わず言つ。男の子と喧嘩してもまあみるだし、女の子と喧嘩してもまあみるを連発する。何より、みちるちゃんの喧嘩の回数は半端じやないのだ。一日に一回は大小の衝突が起き、みちるちゃんは誰かと険悪になつていた。

「さつち、最近青山さんと話してるけど怖くない？」

掃除の時間に、みちるちゃんがまた喧嘩をしたと先生が女の子の生徒に呼ぶて行くのを見送つて、久美ちゃんが言つた。私は教室掃除で久美ちゃんは廊下掃除だ。久美ちゃんはゴミを捨てに行く所だつたらしく、手にゴミの入つた塵取りを持つている。

「怖くないよ。面白い子だよ。」

久美ちゃんは面白いといつ言葉がよほど奇怪だつたのか、私の頭に手を置いて

「さつち、面白いの意味わかつて使つてる？」

と聞いてきた。あんまりの言い草に私は笑つた。確かにクラスでのみちるちゃんは面白いという言葉からかなり縁遠い存在だ。女子からは怖がられているし、男子からは生意気がされている。

私と話している時はぶつきら棒で、ものすごく無愛想ではあるが、宿題をどうしたかとか今日家に帰つたらあれをしようとか、普通の会話をしているので、私は彼女がどうしてその他の人との関わりを避けているのかがわからなかつた、ある時それを聞いたら、彼女はふんと鼻を鳴らして言つた。

「私は一人でいい。自分以外の奴はみんな信じられないし、うつとおしい。」

そのあまりの確信的な言い方と内容に、私は悲しくなつて私も含まれてるの、と聞くと、みちるちゃんはさらにぶつきら棒に答えた。

「あなたは別。」

綺麗な口の形をぎゅっと結んで怒つているようにも見えるが、それが照れ隠しなのを私は既に知つていた。

みちるちゃんが人を信じないその要因らしい事と、お母さんが言つていたみちるちゃんの家が大変な理由を知つたのは同時だつた。それは七時を過ぎた頃だつた。料理部に入つていた私には珍しく遅い帰宅だつた。蒸しケーキを作つたのが、誰が間違えたのか材料が大幅にあまり、勿体無いので追加で作つていたのだ。

私はまだホクホクしている蒸しケーキの入つた手提げを持って、日が長くなつたおかげでまだ明るさが残る夜道を歩いていた。緑色の屋根が近付く。みちるちゃんは部活に入つていないので、とっくに帰宅しているはずだつた。

突如、鋭い怒声が上つたのが聞こえて私は思わずその場で身をすくめた。何を言つていてるかまでは聞き取れない。しかし、猛るような大声と駆け抜けるような怒気は浴びせられている本人じゃなくとも凍りつかされた。その声はどんどん大きくなり、それに伴つて女性の声も聞こえた。涙声である事がここからでもわかつた。私がその

声が緑色の屋根から聞こえていた事に気が付くのに、その時間はからなかつた。

その喧嘩は周りの家々の人々が出てきてオロオロする程だつた。私は家の門扉が見えるほど近くまで来て、ハツとした。そして何故か、とつたに他の家の庭からせり出していたつづじに身を隠した。膝を抱えるようにしてしゃがみ込むみちるちゃんがそこにいた。彼女はまだ制服のままだつた。それは彼女が帰宅した時には、もうこの喧嘩が始まつていたのを意味していた。大声が刺さるようにな響いているのに、みちるちゃんは微動だにしない。嵐が過ぎるのを待つ子供のように、じつと暴風に似た怒声に耳を澄ませている。

そこにオロオロと出てきておた近所のおばさんの一人が、みちるちゃんに近付いていった。おばさんが何か声をかけた瞬間みちるちゃんは火がついたように叫んだ。

「うるせえな！ こつもの事だろ、ほつとけよー寄るんじゃねえよクソババア！」

喧嘩の時にはいつもひどい言葉遣いになつたが、この時はより一層ひどかつた。おばさんはひるんで、ゆっくりと後退した。みちるちゃんはなおも叫んでいる。

「どうせ何も出来ないくせに。同情なんかしてくんnaー！」手をつけられないと判断したのか、おばさんは後ろ髪を引かれるような顔をしつつ、みちるちゃんから離れて行つた。

何も出来ない事を一番嘆いているのはみちるちゃんだつたと私は思う。自分の両親が傷つけ合つて傍で見ている気分はどんなだらう。私にはみちるちゃんが吐いた言葉は全部彼女自身に突き刺さつているように思つた。

その時みちるちゃんは最後にこう言つた。

「やまあみる！」

最後の一聲は一際大きく住宅街にこだました。誰かに対してのざまあみろだつたのか、私はその夜いつまでも考えていた。

みちるちゃんとの会話で、一番覚えているのは、遠足の時の事だ。新しいクラスに慣れ、友達の輪を広げるというのをコンセプトに催される六月のイベントだ。ドレミ橋という地元では有名な橋を渡つた所の広い野原に、お弁当を広げてピクニックをするものだつた。ドレミ橋とは木製の古い橋で、歩くと足音が音階のように聞こえるところ。しかし私には何度聞いても、やたら大きく響くだけのただの足音だつた。それをみちるちゃんに言つと、彼女はそれを言つたら終わりでしょと不良少女らしかぬ正当な事を言つた。

遠足は基本的に班行動で進んでいたが、その班は給食を食べる時、班、つまり近い席の人間同士の五、六人の班だつた。隣同士のみちるちゃんと私は必然的に同じ班で、他に男子が三人に女子がもう一人いたが、いつの間に違う班に紛れて行つたのか、私とみちるちゃんだけになつていて。ドレミ橋を渡ると広い野原に出る。芝の合い間合い間にハコベの花や仏の座、シロツメ草が顔を出し、私は出来るだけそれらの草花を踏みつけないようシートを広げた。みちるちゃんも無造作にシートを広げたが、下にスミレ草を見つけて少し右にずらしたのを私は見逃さなかつた。

広げたシートの上にさつとく蟻が上つて来ては降りて行くのを見ながら、私達はお弁当を食べ始めた。みちるちゃんのリュックから取り出されたお弁当がコンビニスーパーに売られているようなお弁当だつたのを見た時には、何か言い知れない後ろめたさを覚えた。

「親に今日が遠足なの言つてなかつたから。」

私の視線に気付いて、みちるちゃんは特別気にした風もなく言つた。その態度は演技だつたかも知れないが、それでも私の心は普段通りのみちるちゃんの態度に少し和んだ。昼食は待ちに待つた自由時間なので、周りにはお弁当そつちのけで遊んでいる子もいる。遠足というより、親睦会がメインなので、みんなドレミ橋の時なんかより断然盛り上がつていた。

私達の所にはやつたんがポッキーをおすそ分けしに来てくれた以外、

近寄つてくる子はいなかつた。久美ちゃんはみちるちゃんとの接触は避けたいらしく、やつちゃんを通してグミをくれた。

みちるちゃんのお弁当はエビチリやキムチが入つた、見るからに辛いもので、私はみちるちゃんに辛党か聞いた。

「唐辛子とか辛いものが好き。辛いもの好き?」

「つづん、好きくない。甘いものが好き。みちるちゃんは甘いものは?」

「そんなに好きじゃない。」

「ふーん。」

私達は物の好き嫌いの話をすると面白いくらいにかみ合はないので、こんな事は日常茶飯事だつた。そのためこうこう話をすると会話が続かず、今回もそこで切れると思つたのだが、みちるちゃんは珍しくまた質問してきた。

「パプリカは食べられる?」

「パプリカって?」

「唐辛子と同じくらじー真つ赤で、形と味はピーマンみたいな奴。」

「じゃ、食べられる。」

「ふーん。」

この時は変な事を聞くなあと思った。彼女がわざわざ唐辛子と同じくらじーと言つたのに、後になつてもしかしたら、パプリカはみちるちゃんなりに共通点を探して出てきたものかもしれないと思つた。だってこれは親睦を深めるための遠足なのだ。親しくなろうとする時、共通点となるものを探そうとするものじゃないか。しかし、私はこれを思い出すと笑つてしまつ。私達の共通点は唐辛子とパプリカで、一人とも同じくらじー赤いものが食べられるのだ。みちるちゃんがパプリカなんて野菜を持ち出してきたのも、何だか意外で面白かった。

みちるちゃんも思い出す事があるだらうか。拙いと書いたなとが溢れたこのおかしな共通点を。

夏休みも田の前に迫つた頃、短縮授業で部活がなかつたため、私は初めてみちるちゃんと帰りが一緒になつた。私達は取りとめもなく夏休みの予定について話し合つた。彼女は何となく憂鬱そうだつた。家にいる時間あまり増やしたくなかったのだろう。あの日見たような喧嘩はほとんど毎日のようにやつてているのだという事を、母から聞いた。みちるちゃんのお母さんも精神的にかなりまといつている事も。

みちるちゃんの家のすぐ横まで来た時だつた。みちるちゃんがハツとしたのを見て、私も彼女の目線を追つた。黒っぽいコンクリートはカツと焼け付く七月の日差しを浴びて熱を帯び、爆弾の上を歩くような不気味さがあつた。私達のうなじや額は話しながらじわじわと汗ばんでいたが、それを見た時、その不快さがスッと引き、代わりに不気味さが首をもたげた。

みちるちゃんの家の前に、雪のように白いガラスが砕けて一面に広がつていた。

よく見るとそれはお皿だつた。何枚も何枚も割れて粉々のそれは、まるで白い砂利が敷いてあるように見える。そこに、か細い女性が背中を丸めてしゃがんでいた。みちるちゃんのお母さんだつた。おばさんは一欠けらすつ丁寧に両手で拾い上げ、それをエプロンのポケットに詰め込んでいた。左右に一つずつあるポケットはとっくに許容範囲量を超えていて、それでも何故かおばさんはそこに詰め込もうとしていた。押し込む時に指が切れたのか、エプロンは所々血に染まつて、その赤い点は色濃く行き場のない混迷した感情を凝縮しているようだつた。

隣のみちるちゃんが突然弾けるように叫んだ。

「帰つて！」

同時にグイグイと全力で背中を押していく。

「いいから帰つて、帰つてよお！」

みちるちゃんは泣きそうな顔で言つた。男の子に叩かれても平然と

していたみちるちゃんが。保護者に苦情を言われたとかで、先生に呼び出された時も笑っていたみちるちゃんが。

今は泣きそだつた。

力一杯背中を押されて、つんのめるように歩き出した私を見届けて、みちるちゃんは家の方に走つて行つた。それ以後なにがあつたか、私は知る術を持たない。私は本当にそのまま家に帰つてしまつたからだ。帰つた私は引き返す事も、その事をお母さんに話す事もしないで、何も出来ない自分を見つめていた。こうしてみると自分がいかに平凡で穏やかに過ごして来たかがよく分かつた。学校では面倒見のいい久美ちゃんや陽気でいつも元気なやつちゃんの背中にくつ付き、家では優しいのが当たり前な両親に囲まれている。そんなまどろむような日々と正反対の生き方をしてきたのが、きっとみちるちゃんだった。だからこそ、私達は反発し合わなかつたのかも知れない。

私達が最後に会つたのは、八月の新月の夜だつた。九時頃だつたと記憶している。

インター ホンが鳴つた。最近少し壊れ氣味で、かすれたチャイム音だつた。お母さんが玄関に出て行くと、何故か私を外から呼んだ。私が怪訝に思いながら出て行くと、予想もしていなかつた人物がそこに立つていた。

「どうしたのみちるちゃん。」

聞きながら、不安でドッと心臓が高鳴つた。みちるちゃんはそんな私に反して、今まで見せた事のないような笑顔をしていた。みちるちゃんのおばさんもすぐ傍に立つていて、私に小さく会釈をして後はお母さんと話をしていた。時々感極まつたように声を詰まらせた。でもそれは、破片を拾つていた時の表情よりずっと人間らしく生きている表情だつた。

「お別れだから、挨拶しに来たの。」

みちるちゃんは静かに言った。私はそこまで言わなくても全然ピンと来なかつた。みちるちゃん達が行つてしまつた後で、お母さんに聞き直してやつと事態を理解したぐらいだつた。

「人は夜逃げを決行したのだ。

「今日はあいつ帰らないから、今の内に世話になつた人に挨拶してから行く事になつたの。それで、私、あんたにはどうしても一言、言つて行きたくて。」

綺麗な笑顔だつた。みちるちゃんは私が見た中で、その夜が一番幸福そうだつた。そのせいか、私は意味もわからず胸が一杯で、口下手な口がさらに動かなかつた。

「私あんたがいなかつたら、中学何もなかつたのと一緒にだつた。ありがとう。」

淀みない口調で話すみちるちゃんを見て、話す事を練習してきたなと思った。みちるちゃんが感謝の言葉をスラスラ述べられるなんて考えられない。文を書いた紙を持つて、恥かしそうに脣を歪ませながら練習するみちるちゃんが思い浮かんだ。

「私と仲良さそうにしてたせいで陰口叩かれてた事あるの、あんたはどうせ気付いてないんでしょ。」

うん、全然気が付かなかつた。でもきっと、やつちゃんと久美ちゃんが守つてくれたのかもしれない。

「大丈夫かな、ぼやつとしてるから心配だよ。」

私も心配。みちるちゃんすぐ一人でいようとするから。

「これから、どこ行くかも分からぬけど、落ち着いたら手紙書くよ。きっと。」

うん、待つてるよ。ずっと、待つてるよ。

みちるちゃんとおばさんは街灯に照らされながら夜の闇を歩いて行つた。みちるちゃんの足取りは重い荷物を降ろした後のように軽く、元気だつた。私とお母さんは一人が見えなくなるまで、ずっとその背中を見送つていた。鈴虫がどこかでリーンリーンと鳴いていた。

その日から、私は毎晩祈っている。彼女が元気でやっている事、そして何より幸福でいる事。十年経った今でも手紙は届いていない。ふと、郵便受けの方で配達のバイク音がして、壁にかかっている掛け時計を見た。夕刊が届く時間帯だ。私はバイク音が遠ざかるのを聞き、郵便受けの中を確認しに行つた。

私は見た途端、フッと微笑した。郵便受けには新聞ではなく、白くて分厚目の封筒が入つていた。そして、すつきりとした綺麗な文字で大きくこう書かれていた。

森富さち様、唐辛子とパブリカの友人より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604c/>

唐辛子とパプリカ

2011年1月22日17時34分発行